

目次

山清水考（高市皇子）	1
一、はじめに	1
二、山吹	2
三、山の井	5
四、黄泉	12
羽易の山（人麿）	20
一、問題点	20
二、挽歌	23
三、妹背の山	24
持統天皇の船あそび（人麿）	30
一、天の海・天の川	30
二、太陽の船	35
三、船あそび	41
四、持統天皇と吉野	43

大殿の雪（三方沙彌）	48
一、はじめに	48
二、大殿	50
三、冬花の語	52
「ありつつも」の句の主体について（三方沙彌）	55
一、はじめに	55
二、用語例	57
三、承接関係	62
婦負の野の雪（黒人）	65
一、問題点	65
二、表現の獲得	70
三、枕詞と序詞	75
黒人から赤人へ——すすきと浅茅——（黒人・赤人）	81
一、すすき	81
二、浅茅	90
「其彼母毛」の訓（憶良）	96

一、訓と釈	96
二、「其彼」	98
三、結び	104
遠つ人（家持）	105
一、他界	105
二、国しのひ	117
三、雁の使	128
四、貴種の流離	143
花蘂考（家持）	158
一、はじめに	158
二、海・川・山	159
三、桜児・鬘児	168
四、連作的構成	171
万葉集の成立——その根底——	176
一、万葉集の名義	176
二、ことだま	177

山清水考

一、はじめに

山振之 立儀足 山清水 酌爾雖行 道之白鳴 (万二・二五)

十市皇女と高市皇子 万葉集卷二に、「十市皇女薨時、高市皇子尊御作歌三首」と題された中の一首である。

十市皇女は天武天皇の皇女で、天武七年四月に薨じた。以前、壬申の乱で天武天皇方と戦って敗死された弘文天皇の妃となっておられた。薨去の事情は不詳ながら、父帝と夫帝との抗争に悩んだすえの自殺かともいわれる。しかしそうした見かたはあるいは、歴史の伝える行跡を近代の考えかたで律することになるかも知れない。

一方、高市皇子は、天武天皇と胸形ノ君尼子娘との間の皇子で、壬申の乱に天武天皇方の総指揮官となり、持統天皇朝に太政大臣となった人。後ノ皇子の尊とよばれた。

「山吹の」の歌の訓釈 右に掲記した歌については、現在では普通に

山吹の立ちよそひたる山清水汲みに行かめど道の知らなく

とよまれている。しかし古く万葉集代匠記(精撰本)では、第二・三句をサキタル山ノ清水ヲハとよみ、「清水ノ下二、

羽易の山

一、問題点

万葉集卷二に、「柿本朝臣人麿の妻の死りし後泣血哀慟みて作れる歌二首短歌并せたり」と題する歌の、第二長歌の後尾では

…… 吾妹子と 二人わが宿し 枕づく 婦屋の内に 昼はも うらさび暮し 夜はも 息づき明し 歎けども
 せむすべ知らに 恋ふれども 逢ふ因を無み 大鳥の 羽易の山に わが恋ふる 妹は坐すと 人の言へば 石
 根さくみて なづみ来し 吉けくもぞなき うつせみと 念ひし妹が 玉かぎる ほのかにだにも 見えぬ思へ
 ば(2・三〇)

と歌われる。

大鳥の羽易の山の名義は、直感的にわかりやすい。このため、従来はその所在が問題とされた程度であった。しかしこの歌を解する上では、羽易の山の名が提示された所由を考えることが必要になる。それは、この歌では

憑めりし 児らにはあれど 世の中を 背きし得ねば …… 鳥じもの 朝立ちいまして 入日なす 隠りにし
 かば 吾妹子が 形見に置ける 若児の 乞ひ泣く毎に …… 鳥穂自物 腋狭み持ち …… 恋ふれども 逢

ふ因を無み 大鳥の 羽易の山に わが恋ふる 妹は坐すと 人の言へば ……

というように「鳥自物」「鳥穂自物」「大鳥乃」の形で、鳥にかかわる枕詞が頻出するのはなぜかという問題ともかわわってくる。これには、鳥穂自物を「鳥穂自物」の誤写としてヲトコジモノとよむ向きがあるが、はたしてそれではないかという疑問も付随する。

第一の問題については、あとで触れたい。第二の問題では、「鳥穂自物」の鳥穂を「鳥穂」とした伝本はない。万葉集にはヲトコを鳥穂と書いた例もない。万葉集全注卷二では、鳥穂を鳥穂の誤字とする説は認められてよいとし、或本歌(2・三三)の該当箇所も「男自物」となっているので間違いはあるまいとするが、或本歌は詞句が同一であることを示すためというよりも、相違することを示すために出されたのである。なお云えば、万葉集の伝本では男のヲの音を写すのに鳥の字をもってした例は見あたらないし、穂の字を徳に書き誤った例も、トコの音を写すのに徳の字を以てした例もない。それゆえここは、武田氏の全註釈にいうように、鳥穂自物の字面を生かしてトリホジモノとよみ、鳥のついでに穂のようにしての意に、下の脇狭み持ちにかかるのが、まさっていよう。そのように考えてもなお苦しいが、ヲトコジモノ説よりは無理がない。

「鳥自物」「鳥穂自物」「大鳥乃」は、枕詞またはそれに準ずる詞句であろう。上代の詞章には、アサドリノ・アシタヅノ・アヂノスム・アヂムラノ・イカルガノ・イヘツドリ・ウグヒスノのような形の、鳥にかかわる約四〇種の枕詞が見える。そのうちの三種が右の人麿の亡妻挽歌中にあらわれる。

作者はこの歌を詠むにあたって、「大鳥の」の枕詞に、他界から靈魂をはこぶ鳥——ないしその靈魂の象徴——を観じたと思われる。これに関連して注意されるのは、播磨国風土記、揖保郡の条に「大鳥山。鵝、此の山に栖む。故、大鳥山と号く」とあり、出雲国風土記、楯縫郡の条に、神魂の命の御子神に天の御鳥の命があることである。当時このような霊鳥信仰のあったことは、他に白鳥説話の存することや、